

千秀だより

横浜市立千秀小学校

12月号

平成26年(2014)12月 1日



いっぱい食べて大きく育て

校長 市川 幸男

「金色のちひさき鳥のかたちして 銀杏ちるなり 夕日の岡に」これは、明治から昭和初期にかけて活躍した与謝野晶子の歌です。イチョウの葉が、まるで金色の小さい鳥が舞うように、夕日の光に照らされて輝く岡に散っている。という情景を歌った情感豊かな歌ですが、今、バス停から学校を眺めるとこの歌がぴったりと当てはまる情景となっています。師走となりました。

さて、10月末のオープンスクールから、11月に入っての土曜参観、そして市・区の球技大会・音楽会など、子ども達の活躍する姿をご覧いただく機会が多くありました。その都度、保護者の皆様には、学校や会場に足を運んでいただき、温かいまなざしや励ましの声を頂き感謝申し上げます。おかげ様で子ども達は、注がれる愛情を肌で感じながら、しっかりと学習に運動に頑張っていくことができます。本当にありがとうございます。

オープンスクールの保護者アンケートで給食について、「給食で配られたものを、あんなに多くの子が戻していることに驚いた。」という意見をいくつかいただきました。かつての管理教育全盛時代には、「偏食や野菜嫌いなどを矯正する」という観点から、残すことを禁止するといった風潮があり、中には「全部食べきるまで昼休みの時間もずっと残されて食べさせられた」ということもありました。しかし、現在では、食物アレルギーに対する配慮や、自分で食べきれる量を食べ、完食の満足感をもつことの尊重などから、残すことを禁止する風潮は見られなくなりました。変わって登場したのが、皆様をご覧になった、配膳後、自分の食べきれる量を調節し、食べきれない量の戻しの行為です。一方、自分の食事を食べきった子は、進んでおかわりに行きます。調節した戻しのものも含めて、最後にはクラスで殆どの残食が出ないのが現状です。当然、戻す子とおかわりする子との間には、摂取量において、かなりの差があることとなります。こういった現在の給食の様相については、私がかねてより疑問をもっていました。もともと給食の一人分には、それぞれの年代の子どもにふさわしいエネルギー量や、栄養のバランスを考えた基準量が設定されています。戻しの行為は、その基準を摂取できないこととなります。また、食べきれない量という名目のもと、「この野菜嫌い！だから戻す」といったことも現実にはあるのではないかと思います。そういった食の偏りも含めて、保護者の皆様からのご意見で、あらためて考えていかななくてはならないことと受け止めました。もちろん教室では、給食時間等を使い、食と健康・体の成長をはじめとして、食の重要性の指導に努めています。また少しでも好き嫌いをなくし、食の広がり求めようと、一生懸命、子ども達に働きかけています。栄養士さんや調理員さん方は、児童に食べやすく、本物の味を体験させようと、毎日調理法や献立の工夫に励んでいます。本校の給食は、間違いなく美味しいです。最も重要な基盤はできています。いま一度給食指導の目標に立ち戻り、指導を考えて参りたいと思います。

一方食に関する指導は、家庭の協力がなくては成り立ちません。家族一緒の食事は、家庭教育の第一歩であり、家族のコミュニケーションやしつけの場でもあります。社会環境の変化や、調理済み食品の利用など、食生活の在り様も変化し、保護者が子どもの食生活を十分に把握・管理することが困難になってきていることも現実です。そんな現在だからこそ、学校と家庭が協力を強くし、子ども達の食育について、積極的に取り組んでいくことが重要となってきます。これから迎える冬休み、年越し・年始の楽しい行事を送る中、子ども達の食についてもご家庭で話題にし、団らんを深めていただければ幸いです。